参考２

鳥取環境大学の改革に関する説明会（パブリックヒアリング）議事録

【東部】平成２３年１月　９日（日）／とりぎん文化会館
【中部】平成２３年１月１０日（祝）／中部総合事務所講堂
【西部】平成２３年１月１０日（祝）／西部総合事務所

東部（来場者：６０名）

○発言者Ａ

・何人か鳥取環境大学へ学生を送り込んだ立場で発言させていただく。
・鳥取環境大学に入学して良かったという学生、途中で辞めたいといってくる学生がいた。しっかりとした教育をする大学、保証があればどんどん学生を入学させたいと思っている。
・他大学の環境系の学生はどんどん増えているが環境大学はその逆となっている。経営責任を考えていただきたい。この１０年間、教員やスタッフはどのような努力をしてきたのか。高校教員にはその辺が見えてこない。
・公害防止管理者などの環境系の国家資格を取得し社会へ、ある人は地元で公務員になるなど道筋が環境大学には見えてこない。
・個人的な意見として、最初から公立化ありきではないと思う。もっと経営努力をして、その後十分な議論をしてから公立化しても決して遅くはないと思う。
・就職に強いといわれている金沢工業大学では１年生で高校の補習授業、２年、３年生からはインターンシップと、就職に有利なことを実施している。鳥取環境大学は、環境ということで十分な魅力を持っていると思うので、他大学の例を参考にしながら、もっと経営努力をされたらよろしいかなと思う。
・２０年前は偏差値の低かった大学も、今では努力をして上げて学生を集めてきているところもある。その努力には２０年はかかると思う。公設民営で出発した鳥取環境大学は１０年しか経っていないので、もう１０年程努力する余地はあると思う。

○発言者Ｂ

・鳥取環境大学が設置された経緯、平成元年頃から全国的に高校生の進学率が高まり生徒の数も多かった。鳥取県内に是非とも新しい大学を設置してほしいと、高校関係者、県民市民の方々の願いだったと思う。その時期には、全国にたくさんの大学ができた。そういう流れの中で設置されたことはありがたいと思う。さらに京都議定書が採決されたことも重なり、環境問題をテーマにした大学を設置すると非常に時期を得たと私自身は思っている。
・そういう状況の中で、県、市が１００億ずつ設立資金を出し公設民営形式で大学をスタートされた。厳しいような言い方をするが、これが、すべての間違いだったと思う。県民市民の税金を使いながら、学校法人、大学を経営する経験、力量そういうものが果たして鳥取の地にあったのか。地元の産業界の方が大学の代表者になり、経営をされたが、生徒が平成元年頃から減ってくることは見えていた訳である。広島県立大学は、庄原という山間部にあるが、大学が設置された頃は、偏差値は６５を超えて広島大学より入りにくいような状況であった。しかし数年経てばランキング的にも下がってくる。私立大学で公設民営ということを当時は歌い文句として県・市・大学が設置されたが、そういうものはある意味、全国区では通用しない、こういうことは明らかだったと思う。
・そのような中で、開学後４年間は好調に推移しているが、５年目から急激に入学者の人数が減っている。そうした中で、大学の自助努力、問題意識、そういう検討がなされたのは平成２０年からとペーパーではなっている。その間、どう推移したのか伺いたい。公設民営で経営される理事会ではどういう認識をもっていたのか、この数年間どういう対応をされたのか伺う。来ている方の一番聞きたい部分だと思う。
・県、市から出向して大学の経営に当たったのが実態だと思うが、そうした中で、このたびの経営学部を中心とした学科改編をして、経営を公立化にする。私自身は大賛成だが、どういうプロセスで我々が納得できる段階を踏んだのか、ここの部分が非常に理解できにくい。
・資料を見ても平成２２年に大学内で改革案を考えられ外に出された。２００億ものお金を県民や市民から預かっていながら、県民、市民からの意見や批判をこれまで受けてこられたのか。そういうものが新生の大学について、県民、市民が応援しますよと、一番言いたいことは言わしてもらって、その後皆で応援していくと、つながっていくのではないかと思うが、そこのところを避けてこられたのではないかと感じている。

●大学・事務局

・環境という学問領域は新しい学問領域である。非常にグローバルでいろいろなものが含まれている。環境学を勉強して、どういうところに就職できるのかが、一番問題だと思う。最近では、大きな企業は、環境なしに企業経営はできないと思っている人が多いが、なかなか環境部門で社員をとっていくことは難しいようにも聞いている。
・環境をよく理解した人がほしいと聞くが、環境を勉強したからといって採用には繋がっていないと思う。小さな企業になるとなかなか余裕はないかなと考えている。
・我々は就職に関しても一般企業、行政に対して学生を就職させるように努力してきた。
・教育をしていく過程で辞めていく学生がいるが、これはどうしようもない。全国と比較して、特に、うちの大学に多いという傾向にない。
・マンツーマンの教育をやっている金沢工科大学は、非常に有名である。鳥取環境大学の特徴としては、プロジェクト研究がある。１年生のうちから教員と一緒になり調査研究、発表を繰り返して行っている。非常にきめ細かな教育をやっている。こういう教育は本学のような小さな大学だからできると思う。他の大学ではやっていないと自負している。
・それぞれの大学が特徴ある教育をしているが、うちの大学はプロジェクト研究を通してコミュニケーションがとれるようになっていると理解している。
・開学してから４年間、学生数は多いいが、ずっと５０人ずつ減少してきた。平成１７年に私が本学にやってきた時には、入学定員３４２人のところが２７７人まで下がっていた。
・当然その状態を放っていた訳ではなく、４月１日に赴任し、４月８日には学生確保緊急対策委員会を立ち上げ外部の方も入れていろいろな角度から学生確保を検討してきた。
・これで何もしなかった訳ではなく、緊急会議を十数回やったり拡大会議も十数回やったりして学生確保に努力をしてきたつもりである。一端崩れかけた傾向は、なかなか止めることは難しいのは事実である。学生アンケートなどを実施しながら、学生ニーズの把握に努め、新しく環境マネジメント学科を作って取り組んだ。しかし、毎年５０人が減っていく傾向は止まったが、Ｖ字回復までは至っていない現状が今も続いている。
・経営学部を作るプロセスが分からないという意見があったが、大学自体もそうであるが、鳥取県、鳥取市にも経営系の学部がないのも一つの理由である。
・産業革命は、１７６０年にイギリスでスタートして、アメリカ、ヨーロッパで起こり、日本では明治維新以降に始まった。産業革命により、我々は豊かな生活が享受でき、幸せな生活ができるようになったのは事実であるが、一方で、自然環境、地球環境の破壊を代償として払わされたのが、ここ２００年の結果だと思う。それをやっと気づいた。
・これからどうするのか、環境問題は難しく、グローバルな問題である。地球上の人が考えないといけない。環境の保全、人間の経済活動のバランスをとりながらするのが一番よい方向だと我々は思っているし、世界の流れはそういう方向で考えいくと思う。
・環境問題だけを考えて経済の発展を拒否するようなこともできないし、その間のバランスをとってやるという、人たちを作っていくのが、鳥取環境大学だと考えている。
・一方で、環境学、経営学を勉強する、そのバランスの中で、これからの日本、世界に役立つ人材を育成することが、この新しい公立大学の使命だと考えている。
・経済学ではなく経営学というのは、まさにこれから地域、その日本の経営の実質的な部分で、しっかりと働ける人材を作っていきたいということを意識して、皆さんと考えていく中で、最終的に環境学部、経営学部となった経過がある。

●大学・事務局

・資格取得について、新たな改革案を検討するに当たり、考えたところ実務教育の重要性を考えたとろである。金沢工業大学は、実務型でマンツーマンでの教育、企業と密着した形ですぐれた教育をしている。
・鳥取環境大学では、どこまで金沢工業大学まで近づけるのかわからないが、実務的、実社会的な重点化すべきと思っている。そういった意味でダブルスクールにより、実社会に出て活躍できる、企業にアピールできるようにすることが今後重要だと考えている。
・公立化の時期について、現在は学校法人で運営をしているが、なぜ今、公立化なのか。事務局の考えでは、大学の体力のあるうちに生まれ変わらせて、鳥取環境大学を全国によりアピールできる、より学生が来やすくする大学、学生が望む大学を、県、市がそれぞれ力を尽くして大学とともに鳥取の特色ある大学を作るのは今であると提案している。

・大学内部の改革のプロセス、県、市で作っていた改革案評価検討委員会、ホームページを通じて公開し、マスコミへも資料提供してきた。確かに、皆さんを集め説明することが欠けていたかもしれない。そこで公立化への流れでよろしいのかを伺うため、年初めからアンケートを実施している。また、今日の東部地区を皮切りに、明日は中部、西部でも説明会を開催して、我々の改革の取り組みが、これから進むに当たり本当に足りているのか、これに付加すべきものはないのか、そんな動きをさせていただきたい。
・鳥取環境大学を消してしまうのではなく、公立化してより発展させていく大学だと思っている。そういう意味で県民、市民の方々からよりよい大学にするための意見提言を伺い、充実した改革案にしていきたい。

○発言者C

・公設民営方式で出発したのが、そもそも誤りであったと私も思っている。西尾県政を引き続くといった片山知事が就任後、環境大学の工事に入るのか、入らないのかという事があった。議会で設立することが決議され、１００数十億の資金を投入して工事に入った。
・税金を投入し開学してからこれまで、経営状況などの説明が県民に対して一切なかった。アカデミックな大学のシステム上、仕方がないかもしれないが、今後は、経営状況の把握、周知することが必要であると思う。
・場合によっては、私学の雄から私学を運営するノウハウを学ぶことが大事だと思う。
・これからは、１８歳人口がどんどん減っていくので、魅力ある学科、教育、卒業生を送り出さないと魅力のある大学にならない。
・中国地方からどれだけ学生が集められるのかが大事だと思う。公立化しても少子化によりかなり厳しいと思う。
・入学定員２７６人を半分に分け、環境学部は１８８人となるようだが、特徴ある環境大学が薄まってくるのでは、環境大学と名乗っていいのか。いっそのこと鳥取県立大学としては。環境は、大切ではあると思うが、実社会ではほんの一部である。地元は零細企業であり環境を活かした就職は厳しい。

○発言者D

・２００１年から教員をしている。
・金沢工業大学には友人、後輩などが行っているが、最初の１０年は紆余曲折を繰り返した。評判があがってきたのは２０年を過ぎてからだそうだ。自校の卒業生が教授になるには２０年かかると言われている。
・建築学科で物理を教えているが、学科の最終目標は、建築士をとることである。
・５期生３６５人の卒業生を送り出し、2 級建築士が２５人、去年はじめて１級建築士を取得している。また、学内にはISO委員会があり、学生が内部監査委員を設けているが９割は他県の学生である。
・改革には長いスパーンで考えてほしい。公立化により学費が下がり多くの学生が確保できると思っている。

○発言者E

・開学当時は、ユニークな大学でおもしろいなと見ていた。
・なんとか持ち直して、建学当時の勢いがあるようになってほしい。検討委員会などのレポートを見たが、公立化が唐突的に感じる、十分に検討してきたのかなと思う。
・経営見通しの試算について、入学者が１００％で、志願者が２倍確保という前提であるが、この根拠が十分に検討された上で見込まれているのか、提示されれば応援をしていきたと思っている。空港建設のような甘い予測にならないようにしてほしい。

●大学・事務局

・公立化すれば県議会、市議会の目が入る。運営交付金を交付する段階できちんと県議会、市議会で使い道を中期目標に掲げる中でチェックしていきたい。県民市民につぶさに示ししていきたい。
・学生を集めるためにはどうするのか、今後どう付加していくのかが課題だと考えている。試算はあくまで試算であり、いつまで担保していくのか、どう改革していくのかが、今後の課題である。より多くの受験生が環境大学を受験してもらえるように中期計画、中期目標を定め魅力ある大学づくりをしていきたい。
・一過性のものとならないよう、これまでのような轍を踏まないように継続して魅力づくり、学生確保をしていきたい。

●大学・事務局

・開学当初は公設民営、公立大学などいろいろ議論があったが、経営の自由度があるなど公設民営大学を選んだ経

過がる。鳥取大学なども法人化するなど制度が変わり、開学当時とは状況が変わってきている。
・決して公立化ありきではない。大学を持続可能にするためには魅力ある大学にすべきだと思う。今の教育内容でいいのかが、大きな問題である。環境は非常に重要であるが、社会に受け入れられるニーズになっているのか。経営、経済系の大学がないなど地元からニーズがあると思っている。これからも環境は、経済の発展には車の両輪で必要になってくと思う。大学自体と作り直す、環境だけでなく経済も学ぶように考えている。
・一方で、大学は地域貢献も必要であり、中山間地、中心市街地の活性化などにも取り組んでいきたい。
・これまでも努力してきたが、少子化などもあり学生確保が難しくなってきている。私立大学と公立大学では収入構造が違っており、公立大学になるとこれまで以上に手厚くなってくる。こうした厳しい経済状況の中、授業料が低く抑えられると、保護者の負担が軽減され、学生確保に繋がると思っている。２学部２学科にする学部学科改編、授業料の軽減と合わせてパッケージにして改革することにより、今の状況を打開していきたいと考えている。
・開学するときには税金を投入して設置し、経営は民営ということでやってきた。今後は、県と市からある程度独立した形ではあるが、中期計画、中期目標を作成する中で、県議会、市議会、県民のコントロールも可能になると考えている。
・このタイミングで是非大学を抜本的に改革していきたい。

●大学・事務局
・環境大学という名前はその当時は珍しく、一般の高校生には分かりにくかった。環境政策は比較的に分かりやすいが、建築、情報系は少し分かりにくかった。そこから学生確保が崩れていく中で、高校生アンケートをとりながら環境マネジメント学科を開設した。この学科は県外からの学生が多く、北海道から沖縄にわたり全国から入ってもらっている。県内の高校生の多くは経営、経済系の県外の大学に出て行っている。今後は経営学部を設置して学生確保をしていきたい。

○発言者Ｂ
・今日来ている人は皆さん応援団だと思う。だからこそ厳しい意見が出ると思う。
・公設民営は、私立大学であるが、設立資金はほとんど税金で賄っている中で、道義的責任は果たされていない。十分な説明責任が果たされていなかった。定員割れを続けたことを重く受け止めることは、応援するにあたってのベースである。
・鳥取県には中小零細な企業が多い中、経営すべき経営基盤はないと思う。高校生、保護者などが経営学部を望んでいるのか疑問である。
・経営学部に、ガイナーレ、漫画、北東アジアなど県の施策の項目が並んでいるが、いかがなものかと思う。ガイナーレを前面に出して全国から学生を募集するのは浅いというか、考え方が表に出てくること自体が悲しいと思う。
・戦後アメリカに追いつけ追い越せということでがんばってきた。その結果、農業の崩壊、地方の疲弊などこれまでの経済の仕組みが問われている。これからは、説得力のある、人の心を感動させるような教育を考え出してほしい。漫画やガイナーレなどをやって果たして人格を形成できるのか、学校の教育内容をきちんと真剣に検討していただきたい。

●大学・事務局
・経営状況の公開はうまくいっていないということでしたが、ホームページなどでは公開しているが、もっと上手にしていくべきだと感じている。
・科目について、漫画文化論などが強調されて出ましたが、人間形成科目の一つである、プログラムはしっかりとした上で、環日本海に関する科目も経営学の中の一つの科目であると理解してほしい。全国の他大学の経営学部と大きな違いはなく、鳥取県での経営を学ぶということを意識している。

○発言者Ａ
・鳥取環境大学の周辺はアパートができて活気があったのは開学５年くらいだった。今はにぎやかさがなくなり、寂しい気持ちである。
・土曜、日曜は学生がいなくてゴーストタウンのようである。他の大学では、サークル活動をしたりしている、そこも魅力のひとつだと思う。

・魅力的なキャンパスなので、子供とやぎがふれあることなど土日の活用法を考えて頑張ってほしい。学生が大学を選ぶポイントでもあると思う。
・プロジェクト研究などいろいろお話しがあったが、初めて聞いた。高校教員には見えてこなかったので、建築士資格合格などもあわせてもっと発信してほしい。
・中学、高校理科の教員養成課程ができることは大変喜ばしいことであり、将来的に学校の先生に、僕は鳥取環境大学の卒業生であるというだけで学生は増えると思う。もっと長期的なビジョンで改革に時間をかけてやっていただきたい。

●大学・事務局
・大学周辺の寂しさはおっしゃるとおり、大変心配している。鳥取大学も湖山に移転してから約４０年が経過してあのような地域になっている。住宅街が中心の若葉台ではあるが、地域の人と連携してまちづくりをやっていきたい。
・情報発信は、昨年は２５０回くらいしているが、いい情報は流れにくく悪いうわさは流れやすい。これからは、よい情報をどんどん発信していきたい。

○発言者Ｆ
・今現在の県内、県外の学生割合構成、新しい学科構成になった場合の、県内、県外の学生割合はどう考えているのか。

●大学・事務局
・県内６５％、県外４５％となっています。
・環境学部は、県内２割、県外８割ぐらいとみている。経営学部はほとんどが県内になると思っているが、全国からも学生を集めていきたい。

○発言者Ｆ
・経営責任について、今いる人は人事異動で何年後には替わってしまう中で、このような経営計画にならなかったら誰が責任をとるのか、責任の所在はどこにいくのか。

●大学・事務局
・法人化することにより組織を大きく変え、そこが責任を持つことになる。
・国立大学も中期目標をたて文科省の許可を得ている。毎年状況を報告し、評価を受けている。環境大学も同じように報告し評価を受けることになる。

●大学・事務局
・今後、独立行政法人を設置し公立化する、そうなれば経営組織のトップの方に責任をとってもらう。
・県、市には法人の設置者として責任は残る。県、市は経営に対してひとごとではなく、しっかりと中期計画、中期目標をたてきちっと監視していきたい。
・理事長の任命も県、市の設置者が行う。その設置責任を果たしていく。

○発言者Ｇ
・平成２４年４月の公立化の目標に対して積極的な根拠はあるのか。

●大学・事務局
・大学に体力が残っている段階で改革をしていきたい。国の認可の関係など準備作業を含めて最短の期間でやれば平成２４年４月としている。

○発言者Ｇ
・先ほど環境大学の教員が、長期的に改革しないと結果は出てこないと言っていた。なおさら、個人的には急ぐ必要がないと思った。

●大学・事務局

・大学には十分な体力は残っているが、数年前から内部資金が流出する状況にあり、速やかな経営改善が必要となっている。また、学生確保の点からも早く改革していくことが必要であると考えている。

・決して急な話しではなく、これまでに６年かけて改革してきた。県、市も大学からの提案を受けて、年度当初以来検討してきた。学部学科を改変する期間、学生への周知期間などを考えると平成２４年４月が一番適切であると考えている。

○発言者Ｈ

・改革案をどうやって県民に周知徹底していくのか。ホームページなどはなかなか県民には見てもらえないのではないか。大学のホームページは、このシンポジウムを紹介するページのアップが県より遅かったようだ。

・地域との連携で、シンクタンクとの一元化、具体的にどこまで進んでいるのか伺いたい。

●大学・事務局

・ホームページのアップが遅かったことは反省すべき点だと思う。

・東部を皮切りに中部、西部でも説明会を行うとともに、高校への説明会もやっていきたいと考えている。

・今後は、県、市の広報媒体を使ってPRしていきたい。来年度はマスコミを使って積極的にPRしていきたい。

●大学・事務局

・鳥取県には、トルクというシンクタンクがあるが、鳥取環境大学が公立化すれば相乗効果が出てくると思うので、パッケージとして揃えていくことがより魅力を上げることだと考えている。今は、事務的な協議を進め、理事会の中でも検討されると思っている。

○発言者Ｈ

・トルク以外の地域貢献の方策についてはどう考えているのか。

●大学・事務局

・地域に出て学ぶフィールドワーク、ボランティアセンターの設置など、NPO などとの連携、学生活動の活発化、地元の商店街との連携、実学などフィールを生かした活動を考えている。

●大学・事務局

・予定していた時間になったので、終わりたいと思う。メールでの意見、アンケートなどでご意見いただきたい。いただいた意見などを踏まえてより魅力ある改革案をつくり、県議会、市議会にお計りしたい。

中部（来場者：２０名）

○発言者Ａ

・東部で大学生と地域を結ぶ活動を行っている。
・人材育成にウエイトを置いた改革だと思うが、実学を学ばせたくても、残念ながら日本の教授は研究中心で実学とは遠い方ばかりだという問題がある。
・募集をかけても、研究メインの先生が多くなるだろう。その場合に、大学の中で先生をしっかり育てていくカリキュラムを作らないといけない。評価をして足りないところがあっても、それが大学の中で補完できるシステムがないといけない。ダメな人は切っていく、たまたま適性の残った人が残っていくという仕組だと難しい。先生も育てていく観点を持つなど、新しい社会に適応することが必要であり、どのようにサポートしていくのか、改革案に入れた方がいい。
どういう人たちを集めて、先生方を構成していくのか伺いたい。

●大学・事務局

・人材育成は、教育を中心にやっていきたい。
・特にマネジメント学科においては、先生方は実践に力を入れてきた。
・経済学部ではなく、経営学部を作ろうとするのは、実際に企業等で必要な、実践的な人材育成という観点からである。
・今、地球上の様々な環境問題が、人間の経済活動の結果起こっているものだとすると、環境問題と経済活動のバランスを取った人材育成が必要だと考えている。
・こういう改革を頭に置きながら、４６名の教員の内、約４０％の教員が入れ替わるような形で考えてきている。けして実践ばかりではないが、様々な学問のリーダーのような人材を、公募では難しいので、推薦の形で集めている最中である。

○発言者Ｂ

・入試について、前期後期の他に、戦略的に中期を設けている大学もあるが、どのように考えているか。
・改革案では、県内の学生を県内企業に就職させていくようなイメージだと思うが、現在も配置されているキャリアアドバイザーなどの体制をどのようにしていくのか。

●大学・事務局

・最初の年については、受験時は私立なので、現在と同様の方式になるだろう。
公立化後は、まだわからないが、前期後期の形で行われるだろし、AO 入試も多分行われるだろうが、正確にはまだ答えられない。
・経営学部については、鳥取、島根に経済系の学部がないこともあり、県内の学生をしっかり育てて、県内の企業へ就職できる人材の育成と考えている。しかし、全国に多くある経営学部と同じような学部では面白くないし、魅力がないので、マネジメントや金融などの通常科目に加え、特に地域の行政、企業に役立つ学生や、地域の産業として特に農業や観光等の経営に役立つような学生をつくるプログラムを設定した。
また、環日本海の交易ビジネスに取り組もうという県の方針に対応するプログラムなど、かなりの部分について、鳥取の企業社会に対応できる人を作ろうとしている。
・一方、今までも北海道から沖縄まで全国から学生が来ている環境学部では、出口も全国区を考えていきたい。特に廃棄物関係は、人がいる限り出てくる大きな問題であり、廃棄物関係の研究教育の中核にしたいと考えている。昨年作ったサスティナビリティ研究所を中心にして、人材育成をしっかり行い、全国に応えていきたい。

●大学・事務局

・就職支援の体制強化については、新たな大学では十分なものを提供したい。県内企業もかなり厳しく、就職も５０数％という環境で、学生にとっては就職問題が一番不安な問題である。そこで、県内の経済界と連携したキャリアサポーター制度として、環境大学の学生の就職などの相談に乗ってもらう制度等について、経済団体等と話を進めていきたい。
・今もいるキャリアアドバイザーも人員の拡大などの体制強化に取り組んでいきたい。

・また、これまで必ずしも、十分ではなかった県の産業セクション、農業セクションとの連携を、公立化を契機に密接にしなければならないと考えている。

●大学・事務局

・関係者や保護者に配布する広報誌にも記載しているが、入試について、２４年に私学から公立大学に変わるが、入試を行う２３年度中に入試を行うので、２４年度の募集については、私学の入試制度で行うことになる。これは高知工科大学と同じ例。ただし、公立大学化された後は、他の公立大学のような形に沿って行うことになると思う。

○発言者Ｂ

・つまり、中期はないか？

●大学・事務局

・行っているところもあるが、難しい面もあり、これからの検討課題だと思っている。

○発言者Ｃ

・鳥取県に必要な人材を自給自足するためには、鳥取大学だけではなく鳥取環境大学が必要だと思う。
・今のままの出生率だと、６０年後には人口が半分になるらしい。将来、田舎と都会で若者を取り合う時代がくるのではないか。そうなると、地元にたくさん残ってほしいし、他からも入ってきてもらわないと困る。地元で自給するために欲しいのが、教育学部で先生を育てることと、経営に関しても経営法などビジネスに必要となる法律関係も学べるといいのではないかと思う。
・人口が減ると、必ず女性の需要が増える。そうなると女性が仕事しやすくなるような保育所を作ってはどうか。大人になってからも入りたくなる女性も増えると思うので、女性の学生と教職員のためになるようなものを作ってほしい。

●大学・事務局

・経営学部には、財産権と法とか、契約と法など、法律関係も用意している。
・現在も保育室は用意している。あまり利用されていないが。

○発言者Ｃ

・ＨＰに学長の一言がない。学長は顔なので、アピールするためにアップしてはどうか。

●大学・事務局

・多分あると思うが、引っ張り出し方が複雑かもしれない。うまく出るようにしたい。

○発言者Ｄ

・計画が一般人にとっては性急に進んだ気がする。内部では長い間協議されたのかしれないが、マスコミに出だしたのも最近のような気がする。
・設立当時、作るべきかどうか協議があったと思うが、そのとき関った人たちが現在までどのように責任を持って関ってきたのか。ここにくるまでに、もっと努力が必要ではなかったのか。
・中西部に学校を開くのは望ましいが、中西部の人間にとっては、通学に関しても県外の大学と一緒だという認識もある。魅力がなければ、あまり経費に差のない県外の大学に出てしまう。公立になっても魅力がなければ外に流れる。私学でも人気のある大学もある。公費を導入するからには責任を持って、今まで以上にやっていただきたい。改革案に書いてあることは今までやっていてもよかったものである。
・この学部学科編成が、本当に学生増と就職につながるものであるか、もう少し深く検証していただきたい。
・環境は世界的にも重要なテーマであるにも関らず、大学がこうなったのはなぜかと思う。環境大学として、これまでの学生が環境の分野で就職した実績はどうか。

●大学・事務局

・努力が足りなかったかという点については反省も多々あると思う。
・この改革は２年間くらいで進んだように見えるが、実際は、Ｈ１７に学長として着任してから続いている。Ｈ１７の４月８日には学生確保緊急対策懐疑を外部の人も入れて作り、なぜこうなったのか検討してきた。卒業生や学生の意見も取り入れながら、途中でも３学科から４学科に改組するなど、毎年５０人ずつ減っていたのを、なんとか止めることはできたが、Ｖ字回復までは難しかった。
・根本的な改革をしなければいけないと考え、あらためて、学部学課と運営の改革をしようとして現在に到っているのであり、何も放っていたわけではなく、最大の努力をはらってきたと思っている。
・私立であり、授業料が高いから来ないということもあるかもしれないが、やはり、「この大学に行きたい」と思わせるものを作っていかなければいけないと思っている。
特に最初の頃は、定員よりも100人以上多く取るなどの大学の運営の仕方のマズサ加減も問題あったと思う。そのことも十分注意しながら、新しい大学づくりをやっていきたい。

●大学・事務局

・今、環境政策学科が文系で一番環境に関する学科であるが、ここでは法律や経済や環境政策的なことを学ぶ。卒業生は、一般の会社や製造関係、公務員など、一番いろんな分野に就職している。環境マネジメント学科はまだ卒業生を出していないが、環境に関連する会社やいろいろな分野に進むものと思う。
環境を学びながら工学系の建築やデザインを学ぶ学科からは、建築系や不動産に半分近く就職する。
情報システム学科は、約半数がコンピュータ、情報関係に進む。
・全体の卒業生の就職内定率は、これまでずっと94%前後で推移していたが、一昨年の卒業生は86%。いわゆるリーマンショックの経済的影響を受けた最初の年の卒業生であった。昨年はさらに82%。地元はもちろん、県外にも就職するもの大変な時代になっている。
・今年３月に出る卒業生の内定率は、50%を若干超えたところという大変厳しい状況である。大阪と鳥取に就職開拓の専任職員を置いているし、学内にも３名のキャリアアドバイザーを置いて対策を取っているところである。

●大学・事務局

・魅力づくりがこれで十分ではなく、まだまだ足りないと思うので、このような場やＨＰなどで県民の皆様から、大学を変え、魅力をアップする方策を引き続き求めていく。
・当初たくさん来た学生が急に落ち込んできたのは、魅力づくりの継続的なバージョンアップが十分ではなかったということも端的に反省しなければならない。
・あわせて、就職対策についても、現在の厳しい経済状況を見据えながら、学生が就職先に訴えかけられるような特質づくり、資格取得をサポートする体制を新しい大学の大きな柱として進めるべきだと考えている。

○発言者Ｄ

・過去に、ある学生が「どうしても環境大学で学んだことを活かした仕事につきたい」とねばって、結果環境関係の仕事に就けた。大学で学んだ自信と誇りをもって巣立っていく生徒をひとりでも多く輩出していただきたい。
・今回の改革に関られた方たちは、当初、「鳥取市に大学を」と言った人たちよりも、自分の発言と計画に責任を持って今後の学校経営に関っていただきたい。
・環境大学という大きな名前の大学なので、ぜひ、その分野に優秀な人材が輩出されるように努力していただきたい。

○発言者Ｅ

・理念などはすごいとは思う。
・倉吉市の子供たちはどこに向かっていけばいいのか、と考える。これまで長年専攻科に勤務し、常に生徒には「リーダーになれ」ということと「県内にいても県外にいても、常に鳥取県のことを考えてくれ」ということを言ってきたが、経営マネジメントなどを勉強して、県外の会社を経営したり、国際化をして国外に行ってしまっては、大学の理念としてはいいが、どうかと思う。
・これだけ財政が緊迫して専攻科も廃止されていく中で、かたや公立化ということになれば、税金がどう使われていくのかということが税金を払う県民の思いである。
・国際化というよりも、出舎力というか、農業経済を中心とした専門高校や鳥大農学部、環境大学の環境学部をリ

ンクさせ、田舎の農業を活性化させるためのリーダーを育てて欲しい。

●大学・事務局

・マネジメント、金融などの基本的なものも重要だと思うが、地域経営を重視し、地域の企業、行政、ＮＰＯなどの団体の経営をしっかりやることに加え、農業経営を中心とした新しい経営に対応できる人材の育成を考えている。また、地域の活性化のひとつとして観光経営にも取り組んでいきたい。さらに、環日本海の交易ビジネスに実践的に対応できる人材の育成を大きな柱として、他の大学にない経営学部としたい。

○発言者Ｆ

・いろいろ考えているのはわかるが、この定員の人数規模で、これだけたくさんのものが全部できるのだろうか。何千人の大学ならわかるが、この規模なら、ひとつかふたつの飛び抜けた魅力があればいいのではないか。

●大学・事務局

・大学を作る時には人数は問題となる。４学年で最低１千人が目安。
・鳥取に数千、１万の学生を持ってくるのは考えにくいし、逆に毎年２７６名の学生を鳥取県から出していくのは、かなり十分な人材育成に応えられているのではないかと思う。また、数が少ないことはきめ細かい教育にもつながることである。現在行っているプロジェクト研究では、全国にないくらいの、きめ細かい教育を行っている。これは規模が小さいからできていることである。
・小さいけれども、ピカッと光る大学を目指している。２７６名はけして少なくない。

○発言者Ｆ

・鳥取の人間はおとなしすぎると言われる。学生の中で１割、２割は営業で活躍できる明るく朗らかで人懐っこい人間の育成を。営業力のある鳥取県人を育て、そこが特徴となりＰＲできるような大学、学生、人間づくりができれば、企業も採用してよかったと思える。きめ細かい教育ができるのであればぜひお願いしたい。

●大学・事務局

・人間づくりは重要視している。すでに人間形成センターで社会人に向けた人材育成を行っている。１年から４年まで通した人間形成は、誇れる教育体制である。

○発言者Ｃ

・関東や関西への広告、アピールはどのように行っているのか。

●大学・事務局

・受験情報誌やWEBが受験生に対する一番の情報源として重視している。また受験案内を持って、特に西日本には出向いて広報している。

○発言者Ｃ

・今の人は名前がわかれば、すぐにインターネットで調べるので、とにかく名前を出してほしい。
・今日の話を聞いたら、インターネット以上に面白いことがあったので、もっと出していってはどうか。

●大学・事務局

・これまで学校法人として制約があった部分はあるが、これからは県であれば東京本部や関西本部を県外の手足として各地域へ情報を届けたりすることも考えていきたい。より広く公的な媒体を使ったＰＲも考えていきたい。

●大学・事務局

・小笠原から来ている学生もいるので全国的には知られていると思う。
・県外から来て県内に就職した学生もこれまで７０人近くいる。

西部（来場者：４０名）

○発言者Ａ

・高校２年生の子どもを持つ親である。子どもが改革案を友達と見て、現状など何も知らないままに、率直な意見を述べていたので紹介させていただく。
・まず、地元出身の高校生を優遇するような制度を設けたらどうか。学費を多少軽減するとか、市役所に採用枠を設けるなど。
・鳥取の高校生は、東京や大阪などの都会に出たいと思っているので、そのような面で何か特別な措置を設けたら、地元の高校生が入るのではないか。
・それから、２４年４月の予定と伺っているが、受験対策を踏まえると、早めにきちんと公表して欲しい。
・それから、新しい大学の偏差値は、どれくらいになるか。大学のレベルは、どれくらいの学力があれば入れるものになるのか。
・それからもう一つは、環境大学という名前を、この際変えたらどうか。重みが無く、伝統に裏付けされていないのではないかと思う。
・以上、女子高校生の生の意見ということで、聞いてやっていただきたいと思う。

●大学・事務局

・答えられる範囲でお答えさせていただく。
・まず、地元出身の優遇枠ということである。これについては、今後の公立大学に向けての検討になるので、正直まだこの点については検討していない状況である。
・また、公立化等の方向がきちんと定まり、大学の中身等の制度設計をやった上で、その辺りの受験などをどうするかということも考えていくことになろうかと思う。
・ただ、他の県の例などを言うと、例えば、県内の出身者の方には、入学金を若干低めにするとか、若干割り引くと言ったような制度を設けている大学などもある。
・他の県立大学等の例なども見ながら、その辺りは協議会や議会などの場で御議論をいただきたいということを考えている。
・実際の入学であるが、来年度は学校法人が存続するので、２３年度、来年の試験は、今年と同じ形になろうかと思う。ただ、公立化や学部学科の開設については、国の協議が必要となるので、その状況を待ってからの正式なリリースになろうかと思う。
・また、検討状況等については、このような説明会や、その他随時資料等を提供させていただくなどし、その中で、早め早めに、受験なり、そういったものの準備ができる形は、少なくとも県内には、情報等をきちんと届けていきたいと思っている。
・特に、進路指導をしていただく上では、そういったような早目の状況提供が非常に大事かと思うので、できるだけ早くお手元の方に、特に実際の高校生の所に、情報がきちんと、素早く届くようなことは心がけていきたいと思っている。
・偏差値については、今のところまだよく分からないので、正式に公立化が決定してからの話になると思う。
・環境大学の名称の部分であるが、現在のところ、協議会の中では、この名称については、具体的な変更等の検討は行っていない。
・また、名称を変えたらどうかとか、どうかしたらということがあれば、お寄せいただければ、皆様方の御意見等も踏まえて、協議会の中でどうするかということを改めて議論をさせていただくということになろうかと思っている。

●大学・事務局

・個人的には、環境大学というのは、非常に素晴らしい名前で、全国にたった１つというか、それぐらいの名前である。これまでの実績から、北は北海道から南は九州・沖縄まで、学生は来ていただいており、これから環境問題を抜きにして、なかなかいろんなことは語れないと思っている。
・この名前は、非常に重要に取り扱っていきたいと思っている。
・伝統と言われたが、まさに鳥取環境大学としての伝統を作る一つのものとして、環境大学というものを私自身は残したいと思っている。

○発言者B

・私の学校は実業高校であるので、入試制度についてのお願いになるのかと思う。また、その次の段階ということも考えていただきたいと思う。
・まず、本校の生徒の特長としては、技術はそこそこ身に付けているが、ペーパーテストは苦手であるという生徒が多い。
・そのような生徒の中にも、やはり大学に行きたいという生徒もおり、できれば、環境大あたりに入ってくれればと我々は思っている。そのような生徒を入学させていただきたいというのが一つ。これは、入試制度の方で、先ほど偏差値の話もあったが、普通のペーパーテストだけというのでは、少し困るかなと思っている。
・それ以上に私が心配するのは、推薦入試等で入学したはいいが、単位が取れなくて卒業できないというような事態があると、更に困るという気がする。
・であるので、そのようなペーパーテストの苦手な生徒、学生に対しての支援策なども、もし考えておられたら、少しお話いただけたらと思う。

●大学・事務局

・どのような入試制度になるかというのは、もう少し、将来的な問題もある。
・ただし、もし２４年度からのスタートとすると、最初の試験は、まだ私立大学で試験するので、今までどおりの試験になるのかなと思う。
・いろいろな学生さんがおられるので、どこの大学でも、いろんな形で学生の支援をやっていると思うが、鳥取環境大学が本当に全国に誇れるような教育の１つのシステムとして、プロジェクト研究というのがある。これは、１年生から教授の先生と一緒になって、調査、研究、発表ということを繰り返すもので、半年ごとにやっており、そのグループも半年ごとに変わっていくものである。
・いろんな人といろんなディスカッションができる。そしてプレゼンテーション、それからコミュニケーションを身に付けるというのを、最大の売りにしているところである。
・そのような所も含めて、先生方と学生の皆さんとの親密な関係を作りながら、日頃から教育ということを重要視しているところである。
・確かに途中から勉強するのが嫌になって落ちていくということが、どこの大学でも起こるものであるが、我々の大学では、特に１・２年生は情報リテラシー、情報学の授業が全員必須である。
・それと、１・２年生は英語が必須になっている。これらの授業の出席を見ながら、例えば２回とか３回続けて授業に出てこないとかはすぐ分かるので、そのような学生にはフォローシステムができており、チューターの先生がすぐに対応して、どうしても難しい場合は、副学長が対応したり、父兄の方と連絡をとりながら対応している。
・できるだけ、そのような学生を元に戻してやるということをやりながらやっているので、今後もそういうことは続けていかないといけないし、続けていこうと思っている。

○発言者C

・単に意見として聞いていただきたいが、山陰地方初の経営学部の設置ということには大賛成である。
・というのが、鳥取県、私だけかも知れないが、大半は所得が低いという県の中で、保護者は、一生懸命稼いだお金を都会地の大学に通う子ども達に仕送りしている。学費もそうであるが、生活費などもあり、大学にかかる経費ではないと思う。
・そのような中で、地元に、家からでも西部からでも通えるような位置に、そういった学校ができるということは大賛成である。
・地産地消ではないが、鳥取県の中で、経営学に携われる学生を育てるということは非常にいいことだと思うし、環境ということもあったが、これから経営も環境抜きにはなかなかできない場面が出てくるのではないかと考える。
・それと、特に西部地区というのは、北東アジアの玄関口になっており、これらの地域といくつかの接点がある。
・そして、今後、経済の関係としても、鳥取県の中心となって、北東アジアの交流の中で経済が活性化の１つのきっかけになるのではないかと思う。
・その中で、中国語、韓国語、ロシア語等の語学を学んで、実践できる地域でもあるので、単純にこれも心強い改革案であると思う。

・最後に人間形成であるが、単に知識を持っていればいいというのではなく、知識を人としてきちんと活かすことができる人間形成の４年間、又は６年間としていただけるよう非常に期待して意見させていただく。

●大学・事務局

・環境学部と経営学部を作る大きな目的は、これまで約２００年間は、産業革命が起こってから、どんどん技術が進歩して、我々の生活は非常に豊かになったし、非常に幸せな生活を送ることができるようになったのは事実であるが、その代償として、自然環境の破壊と言うか、いわゆる環境問題を起こしてしまった。
・これからの問題は、自然環境の保全と人間の経済活動、このバランスを常に考えながらやるような人材を育成していくというのは、非常に大事だというふうに思っている。
・そういうこともあり、そのような人材を育成できるのは、環境大学であろうと考えており、まさに、新たな大学では、その環境問題と人間の経済活動のバランスをとっていけるような人材育成を目指している。
・経営学部については今言われたとおりであるが、他大学にも経営学部はいくつかある。
・それらとは違ったものを作らない限り、新たな大学の経営学部のいいところがだせない。
・そこで、２つの柱を立てた。１つは、まさに地域の経営。もちろんマネジメントとか、基本的な金融の問題とかいうのは、もちろん科目としてあって、教えるプログラムはあるのであるが、それ以外に、地域経営というものを非常に考えていて、一つの柱にしている。
・その中身は、企業の経営。そして、地域の行政組織の経営。それから更にＮＰＯを含めたような経営。そういうものをしっかり考えてやれるプログラム。と同時に農業経営。これからの食糧問題も含めて農業経営は非常に大事である。
・それからもう一つは、鳥取県。環境経営と言うか、環境もこれから非常に力を入れていく部分がある。環境経営にもしっかりと対応していきたい。
・この地域経営というプログラム。今３つ言ったが、これらの３つが一つの柱として、経営学の中にある。
・もう一つは、先ほどから出ている環日本海の交易ビジネス。これにしっかりと対応できるような人を作っていくというのは、他の大学にはないので、その辺りを売り物にしてしっかりとした経営学、特徴のある経営学を作っていきたいと思っている。

○発言者Ｄ

・本校は普通科の生徒と商業科の生徒がいる。自分達にあった形で進学を目指していくわけであるが、特に商業科の生徒については、専門学科であるので、簿記。学科の３年間で取り組んだ簿記等の資格を活かして進学をするという形がほとんどであるが、先ほどから出ているように、なかなか地元にそういった形で進学できる大学がないので、ほとんど関西圏に出ていく。
・そのような中で、頑張った成果はあるが、経済的な理由で進学を断念せざるを得ない生徒もあるし、保護者の方が大きな負担をして４年間出したものの、やはり地元に帰ることができないということで、卒業後も保護者の方からそういったことで多少残念だという声を聞いたりする。
・そういった意味で、鳥取県に経済学・経営学が学べる学科ができるのは本当に私としてもありがたいことだと思うし、できれば、先ほどもあったが、そのような専門学科の子たちの取組。また普通科の生徒とは違う成果をクラスに活かして受け入れていただけるような入試制度を是非前向きに御検討いただきたい。
・後は、出口である。４年間大学で学んで、そして地元に、鳥取県や島根県、そういった山陰両県に就職できるようなパイプというか、そのような開拓もしていただけたら大変ありがたいと思う。

●大学・事務局

・新しい大学ができ、何と言っても、県・市で作る地方独立行政法人。県立大学というのが近い言葉で表せるかと思うが、鳥取県の大学としてとらえていくべきだと思うし、鳥取県の高校生の皆さんにしっかりと勉強していただく場を与えるというのは、非常に大きな役目の１つだと思う。
・個人的な発想で申し訳ないが、そのような意味では、県枠みたいなものもしっかりと考えていきたいと思っている。どれぐらいできるかどうかは分からないが。
・他の大学を見も、それぞれ、県枠をとってやっておられる部分もあるので、我々としてもそれを考えていきたいと思うし、入試制度についても、ただ今のお話もあり、一律にただひたすらペーパーでやるというのも、いろいろ問題があるかと思う。その辺りは、将来に向けて研究させていただきたいと思う。

●大学・事務局

・出口対策という部分で補足させていただく。
・確かに地元に戻れるということ。とりわけ県内の大学を目指す方というのは、やはり県内の志向が強い方。就職についても県内の志向が強い方が大半を占めてくるのであろう思う。
・そういった意味で、この大学もきちんと希望をバックアップして県内に留まる。或いは県内に就職できる道をできるだけ多く作っていくことが必要かと思っている。
・そのため、いわゆる就職対策。Wスクールにより資格を取得するということや、より地元の経済団体。或いは、せっかく県と鳥取市での公立大学を設置するので、それぞれの産業部門との連携もきちんと図りながら、より県内での就職を目指す子どもにはその道を広げていく。そういったことも今後の取組の中では、更に拡大して行きたいと思う。
・あと、今までの学校法人の中では、やはり私立の大学であったので、制約もあったかと思うが、公立大学という形になった場合では、県とのきちんとした連携のもとに、そういったような対策もより充実が可能ではないかと考えている。

○発言者E

・今の説明を伺いし、魅力づくりのための取組ということで、地元とともに歩む大学づくりのところに非常に魅力を感じたところである。
・就職のことがどうしても気になるが、地域とのパイプということは当然あった方がいいと思う。なかなか県内でそんなに企業も多くない中、入学した生徒にすべてを保障するということは、正直なかなか難しいかなと思う。
・そのような中で、学生というのは、本来、若い力というかエネルギーを持っている。そういうものだと思う。
・例えばサークル活動にしても、それから大学での研究にしても、この地域の、例えばここに空き店舗や農村の空き農家等の活用などもあったが、そのようなところでアイデアを出してもらえば、すごく若い発想で、いいアイデアが出ると思う。
・自分達で、進路を切り開いていく力。このようなものも持てるように。そのためには、生徒たちも今まで勉強はしてきたかもしれないが、農業体験でも、それから経営の体験でも、そのような体験をすれば、いろいろとアイデアが出てくると思う。そこのところを発展させていただければ魅力のある大学になるのではないかと思っている。
・大学とはそもそも高等教育機関であるので、研究という部分が主になるとは思うが、地域との連携を考える上では、実学的な所も増やしていけば、県内に鳥取大学もあるわけであるし、鳥取大学との住み分けということも考えていったりして、入る生徒のニーズということも考えたら、そのようなことも考えていくのがいいのではないかと思う。
・もし、今考えておられる範囲で結構であるが、例えばここにガイナーレ鳥取と連携した講座などが記述してあり、まだ構想段階だと思うが、どういうことを今の段階で考えておられるかということを伺えたらありがたいと思う。

●大学・事務局

・教育の総論については学長にお任せし、今考えている大学づくりの概略を私の方から御説明する。
・まだまだ検討段階であるので、大まかな構想、或いは、アイデア部分も含めているものであるので、御承知いただければと思う。
・まず、地元とともに歩む大学づくりのうち、西部のサテライトスペースであるが、これは何らかの拠点的なものをこの西部なりに場所をどこかにお借りする形で開きたいと今思っている。
・どうしても大学の所在地が東部にあるので、こちら西部の方で学生たちがやってきて地元の方々と触れ合う。先ほどあったように、実学的な意味で、例えば地元の商店街をフィールドとして地域経営の実践をさせていただくとか、そのようなことを行うためには、やはり何らかの拠点、或いは場所が必要ではないかと思っている。
・そういった意味で、何らかの所の拠点を整備したり、拠点をお借りして学生の授業、いわゆるフィールドワークであるとか、その場で社会人講座を開催するといったことも考えている。
・また、ガイナーレの関係については、現在のところ、まだまだガイナーレ側との話をこれから詰めていくところであるが、例えば、環境大学で開講される体育の授業でガイナーレの選手に何度か教えに来ていただくとか、また、スポーツ活動、いわゆるクラブ活動の部分でも教えを請うたり、ちょっとした夢にはなるが、そういったものを地域で一緒に、学生がその地域の例えば小学生、中学生と一緒に、ガイナーレの選手とともに活動するといったような。できればそういったような地域と密着した学生活動も、この中で展開できたらと思っている。

・それともう一つ、拡充したいと思っているのが、公開講座である。
・今まで環境大学でも、「本の学校」を舞台に、いくつか公開講座をやっていただいているが、今までの学部学科の関係で、環境系が中心であったと思っている。
・そういった意味で、経営学部が設置されれば、例えば企業の経営に関する部分であるとか、そういったより幅の広い公開講座、或いは社会人の方に定期的にお聞きいただけるような講座も開設が可能ではないかと考えている、計画を順次中身を詰めているところである。

●大学・事務局
・先ほど、若い学生さんたちの発想、或いはその力を利用してという話もあった。
・当然今でもいろんな形で学生さんが非常に積極的にまちに飛び出して、体験をしながら研究をしている部分があるし、先ほど説明したプロジェクト研究というのは、実は、大学の中でじっと座っている研究だけではなくて、先生方によっては外にどんどん出ていって研究テーマを持って、そこで研究・調査して発表するということをやっている。
・特に、本学は小さな大学であるので、学生さんと先生方の連携というのはしっかりと出来ており、先生方も非常に積極的にフィールド活動をしていただいている。ただ今いただいたいろんな御示唆をもとに、今後ともしっかりやっていきたいと思っている。

○発言者Ｆ
・非常に小さい話であるが、西部では、大学の位置と遠いという関係がある。
・通学を希望する学生にとっては、通学が可能なような大学のあり方、或いは支援など何かお考えがあるか。
・例えば、サテライト作られて授業を朝の早い時間はこちらでするとか、無理かも分からないが、スクールバスを米子から出すとか。何か御提案があればと思う。

●大学・事務局
・距離的にいくと、関西であれば、まったく通学圏であるということも言えるのであるが。
・本数があれば問題なく通学できるし、今の段階では、通学のための少し補助などをしているが、米子はその辺り、少し問題があるのは十分分かっている。
・サテライトをこちらに作るというのは、積極的にやっていきたいと思うし、何とか授業みたいなものもこちらで開けるものがあれば開いていきたい。それは１つは授業の時間割等も少し考慮しながら、こちらで１日。１週間のうち１日の間はこちらでいけるような形もとれればいいかなと思っている。
・午前中はこちらでと言っても、午後に帰るときに時間がかかって間に合わないということではだめなので、少しいろんな工夫は考えないといけない。こちらへの貢献というのは少ないので、できるだけ、セミナーとか、集中的な講義、或いはこちらでのサテライトの講義というのは、どんどん作っていきたいと思う。

○発言者Ｇ
・先ほどからお話を聞かしていただく中で、地元出身者にとっては、非常に魅力ある大学という感じを受けた。
・一応、地域発展だとか、地域貢献だとか、地域の人材。こういった要請に積極的に関わるということであるが、一方で、大学を安定的に経営しようと思ったら、この大学がどのような形で魅力を持つのかということを県外の方に向けて、メッセージというか、そういったものを一方で発信しなければいけないと思う。
・先ほど大学のレベルの話だとか、偏差値の話等もでたが、県内の方にも受験していただく、或いは入学していただくというような魅力も一方で訴えていかなければならないと思うが、県外向けに何か考えのようなものがあったらお聞かせいただければと思う。

●大学・事務局
・一方的に経営学の話をして、地元貢献ということを一生懸命話したが、これまで少し近県を回ってみても、今回このような学部ができることに関しては、非常に興味を持っていただいていることも事実である。
・実は、環境マネジメント学科というものを平成２０年に作った。これは、いわゆる自然環境の保全を中心にした学問領域であり、それをマネジメントするという学問領域であるが、この学部の入学生は、実はほとんど県外の学生である。

・私どもは、これから２つの学部に割り振りして新たな大学を作ろうと思っているが、主として環境は全国区を目指して人を集めたいと。それを集めるだけの先生方もしっかりと来ていただけるようにしたいと思っており、敢えて言えば、経営学部は近県、或いは県内の学生さん。そして、非常に特長のある経営学部を作っていきたいと思っている。
・そして、環境系の学生さんは、それこそ北海道から南は九州・沖縄まで来ていただいているので、この辺りをしっかりとした内容にして行けば、全国区でしっかりと人を集めることが出来るのではないかと思っている
・これまで、６年、約１，７００人の学生さんを出しており、その中で、県外の学生が県内に就職した人が、だいたい７０人ぐらいおられる。
・そういう意味でも、これから大学を作っていって、どんどん県内に就職していただけるような学生づくり、県外の学生さんが県内に就職して、活動していただけるような学生づくりもしっかりとやっていきたいと思っている。

○発言者Ｈ
・先ほどもあったように環境大学。この大学の鳥取県西部地区の認識度というのは、まだまだ低い。いろんな層で低いのであるが、特に中学生の中で環境大学を知っている生徒というのはほとんどいないのではないかなと思う。
・ただ、子どもの進路を考えると、中学校の頃から興味を持ってくるというような大学づくりというのも必要ではないかなと思う。
・その中で、１つ、中学・高校の教員の免許がとれるというのが、すごく私にとっては魅力であり、大学の出身者が県内の教員になって、生徒達に大学のアピールができるというような将来的な展望もあるかなと思う。
・それから、是非そういう動きがあるのであれば、中学校の理科の授業に大学の方からいろいろ御支援をいただいて、理科教育の充実というような、そのような場面もあってもいいのかなと思う。
・実は、鳥取県は、理科教員が非常に少なく、なかなか教員の確保ができていないという現実がある。そのような部分で、卒業生が教師になるということも望むところであるし、現在の大学の技術を中学校教育の発展というような所にも還元していただければありがたいなと思う。

●大学・事務局
・教職免許については、初め高等学校だけを考えていたが、先生方の方から理科の中学の免許の方がもっと力を入れるべきじゃないかということで、現在は、中・高の免許が取れるように考えている。
・中学生へのアプローチであるが、時折、呼ばれて講義に行かれる先生方も出てきている。鳥取県版のＩＳＯ取得についても、高等学校、中学校へ向けて調査をしながら、どんどん入っていけるものは入っていきたいと考えており、そのようなところを通しながらも、中学生への我々のアプローチというものを是非ともやってみたいと思っている。

○発言者Ｉ
・本校からも環境大学の方には毎年お世話になっている。
・そのようなことで、今現在でもきちっと、うちからいった生徒、いろんな生徒行っているが、個々に対応していただいて、大変感謝している。
・公立化に反対しているわけではないが、公立化すると、本校、専門高校でなかなか勉強の方が苦手であるという所もあったりする。入試が難化傾向になると、せっかく公立化になったが、全県下の高校生が入学できない。他県から優秀な生徒ばっかり入学するということにもなりかねず、鳥取県の中の公立の大学として、本当にそれでいいのかというようなことは、しっかり考えて欲しいと思う。
・いろんなことも含めてであるが、いろんな子がいる。一生懸命やって環境大学で頑張りたいっていうような子が入れないような、それが排除されていくような大学になってほしくないと思っている。就職・出口のところでもそうであるが、どんどん頑張っていただきたい。
・一方で、大学が就職を頑張ると、高校生の就職が無くなるということもまたある。そういったところで、環境大学だけが公立化してどんどん先行されるのではなくて、鳥取県全体の教育を考えながらやっていただくという視点は持っておいていただけるとありがたいと思っている。
・本当に、今までお世話になっておるので、余計公立化でいいなと思うが、入試のところの難化でどんどんまた追いやられるということを危惧している。
・そのようなことが無いような形で、本校の生徒も一生懸命勉強させるが、いいところをとらえていただいて、推

薦入試であるとか、いろんな方法で、また地域のそういう生徒もとっていただければありがたいなと思っている。

●大学・事務局

・先ほども言ったように、公立大学であるので、やはり県の高等学校の皆さんの勉強の場として、しっかりと利用していただくというのは非常に大事かなと思っている。
・入学試験についても、先ほど少し触れたように、少し県内の枠づくりみたいなものをやっていくべきだと思う。
・これは聞いた話であるが、高知工科大は公立化したとたんに、県外から一杯入学生が入ってきて、なかなか地元が入学できなかったというようなことも聞いている。
・高知工科大学では、対応策をすぐに講じられたようであるが、我々そのような例も知っているので、できるだけ早くから対応していきたいと思っている。

○発言者Ｊ

・通学ということで、西部地区の生徒からみると、鳥取というのはやはり遠い。関西や広島などと同じような意識がある。やはりアパートやマンションを借りないといけないということで、例えば、鳥取でアパートなどを借りた場合、大学の方からでも補助などがしていただけたら、生徒にとっても助かる。
・それから通学ということで、米子から鳥取まで特急で行くと１時間で行ける。例えば、特急に乗った場合の通学の定期の補助とか、そういうところも検討してもらったら、生徒も目を向けるのではないか思う。

●大学・事務局

・実は通学問題については、先だっての県議会の方でも、そのような話もあり、やはり米子・鳥取間は、近いようで非常に遠い。意識的にも若干距離があるということは否めない事実かと思っている。
・予算措置なども関わるものであるので、この場で私がこれをしますということはなかなか申し上げることができないが、意識的な距離感、或いは物理的な距離感を縮めるための対策は、これから、県、或いは市とも併せて、どのようなことができるか協議をしていきたいと思っており。
・西部の方にも負担なく東部の環境大学の方に来ていただける対策にどのようなものがあるのか、またＪＲなどとも話をしなければいけないこともあろうかと思うので、公立化の検討と併せて、総合的な対策をどう打つかということを考えていきたいと思う。

●大学・事務局

・大学時代の一人暮らしというのは、人間形成にすばらしい影響を与えるものだと思っている。
・私も長年、学生の一人暮らしを小さなアパートでやったが、そこから見ると、鳥取市の学生さんはなかなかその経験ができないというので、むしろかわいそうかなということも思う。
・何分にも下宿するとそれなりのお金が要るし、現在は２０％の補助をさせていただいているが、これについては、今後存続するのかどうかは、少し検討させていただきたいと思う。

○発言者Ｋ

・環境大学が、鳥取県西部の皆さんにとって遠い存在になっている。顔が見える関係にするために、様々な工夫をこれから考えていただけるのではないかなと思うが、特に子ども達、それから小・中・高の学校の先生方とのつながりをポイントにお考えいただけると嬉しい。
・出前講座ももちろんそうであるが、専門の先生方のスーパーバイザー的な大学として、環境大が随分身近なものになってほしい。
・それから情報発信力を強化していただく形で、環境大が何をやっているのか、内容も見えなければいけない。魅力的な先生もいらっしゃるが、それがなかなか身近に感じられなくて、それが私たちの税金で作られた宝物であるという感覚が実感できるような、そんな仕組みを工夫していただけると嬉しいが、その辺りをお考えか。

●大学・事務局

・これまで、先ほども説明があったが、米子では公開講座だけで、何となくそれでいいかなと思って来てしまった部分がある。
・公開講座も、いろんな方に来ていただけるような形になっていないと思う。根本的に見直さないといけないと思っている。

・そのような意味では、我々が何をやっているかということもなかなか分かっていただけない部分があり、昨日もそのような御批判を受けたところである。大学でもいろいろなことをやっているということで説明したが、そのようなことがまったく分からない。大学の情報が入ってこないというようなことを言われた。
・情報というのは、どのような形で流すのがいいのかということは非常に難しい。
・改めて、何をやっているのか分からないということを御指摘いただいたので、我々としてはもう一度、情報のあり方、発信のあり方をしっかりと考えていきたいと思う。
・また、先ほど意見があったように、小・中・高の先生方との連携もしっかり含めながら、どういう形がいいのかという研究もやっていかないと、なかなか我々だけで動いていても情報発信は難しいかと思うので、是非とも御一緒に考えさせていただきたいと思う。今後ともどうかよろしくお願いしたい。